

# えひめの歴史文化モノ語り

## 県歴博収蔵資料から ⑭

瀬戸内海や宇和海の漁業や交通において木造和船は大きな役割を果たしてきた。木造和船は、地域の船大工が独自の技術や工夫を駆使して造り上げてきたが、今ではもう目にするこ

とが少なくなつた。木造和船を建造する際の設計図に当たる船図面には、紙に描いた紙図と板に描いた板図とがあるが、今

## 木造和船の板図

## 建造技術や型・名伝える

回は宇和島市津島町で木造和船を建造していた船大工から寄贈を受けた板図を紹介する。

板図は船の側面図や、断面図、船名や船主名、進水時期などが記されており、縮尺は10分の1が多い。木材が貴重であったため、1枚の板の表裏に複数の船の図を描いたり、船の寸法を2種類描いたりした板図もある。寄贈者の話によると「あの船がよかったけん、また作れ」と言われ一つの板図で4艘(そう)造ったこともあるという。一方で、板図は船の完成と同時に役目を終え、鮑(かんな)をかきつけて新たな図面が描かれたり、焚き付けとして燃やされたりすることもあった。



1939年、県歴史文化博物館蔵。縦13.2寸、横76.0寸。  
この板図を基に復元した、実物の10分の1サイズ  
の木造船模型とともに民俗展示室2で展示中

出港してから潮が変わるまでが勝負であった。船を造るには、はじめに

船主と船大工とで、船の種類や形、大きさについて相談を行う。金額がまとまると交渉の成立となる。寄贈資料の中には津島町造船組合による協定価格表もあるが、価格表はあくまで目安であり、「金がないけん、そんなにいいもんいらんぞ」と船主に言われることもあった。木造和船の建造は、カーラやシキ(敷)と呼ばれる船底板の加工から始まる。船底板を折るには、ヤキダメといって板を火であぶって

曲げる方法もあるが、寄贈者は、板を蒸して柔らかくする方法を用いたという。母親がかまどにお湯を沸かしておき、父親と3人がかりで行った。板の上から柄杓(ひしゃく)で湯をかけ、下にはモップ状にしたシュロを置いて、上下の両方から蒸していく。板に湯をかけながら「もうちょっとしたら折れるぞ」というぎりぎりを見極めて行う作業は、2、3日を要した。

板図は木造和船の船型を知る上で貴重な資料であり、船主との信頼関係のもと、確かな技術とこだわりをもって取り組んだ船大工の仕事を今に伝えている。

(専門学芸員・松井寿)

〈随時掲載します〉